

## 研究ノート

## 現代台湾語書き言葉の多様性と規範形成

—教科書・雑誌の分析から—

吉田 真悟

## 【目次】

第1節 研究の背景と目的

第2節 先行研究

1. 概観

2. Klötter (2005)

3. 林初梅 (2009)

第3節 用語の定義

第4節 教科書における文字使用

第5節 雑誌における文字使用

第6節 考察と今後の課題

## 【要約】

本稿は、台湾語書き言葉の現在（主に2010年代）の姿を明らかにするため、学校教科書と民間の雑誌における文字使用の状況を調査し、そこから得られた考察をまとめたものである。調査の結果、ここ10年間で漢字とローマ字それぞれについて、教育部の発表した方式を軸とした規範形成が進んだ一方、漢字かローマ字かの選択の様相は依然多様であり、書記媒体により傾向に差があることが明らかになった。

## 第1節 研究の背景と目的

台湾語<sup>1</sup>の正書法に関する議論は、早くは日本統治時代の1930年代に行われた「台湾話文論争」において既になされており、民主化後の1980年代後半から始まった「文字規範化論争」で再び争点となった（林初梅2009, 230-243頁）。書き言葉標準化の問題を困難にしている原因の一つは、対応する漢字が存在しない、ないしは不明確な語彙が一定数存在することである。このような語は日常的・基礎的な語彙に特に多く、15～20パーセントを占めるとも言われる（王育徳1985, 18頁）。主な表記法は、①漢字専用（全漢）、②漢字ローマ字混用（漢羅）、③ローマ字専用（全羅）に大別されるが、漢字表記を巡っては上述したような語彙にどの字を当てるかで意見が分かれ、ローマ字についても複数の表記体系が提唱されている。

筆者の研究の主な目的は、このような曲折を経た書記言語としての台湾語が2010年代現在どのような姿となっているか、言うなれば、現代台湾語書き言葉の共時態を記述することにある。音声言語を主要な研究対象とする言語学において、書記言語に対する関心は長らく周縁的なものであったが、近年は文字や書き言葉を単に話し言葉の再現としてではなく、独自の論理を有する別個の体系として扱う潮流が生まれている<sup>2</sup>。また文字が「人工的なものであり、意図的な操作を受けやすい」「文化的な道具」（クルマス2014, 230, 238頁、句読点は原文のまま）であることを考えれば、書き言葉の研究は言語そのものの観察に止まらず、それを取り巻く社会的状況や書き手の思想といった、社会言語学的ないし言語社会学的な視点が不可欠な分野でもあると言える。

現代台湾語は、表意文字<sup>3</sup>である漢字を表記手段の一つとしており、また中国語<sup>4</sup>とダイグロ

シア<sup>5</sup>の状態にある「少数言語」<sup>6</sup>として、正書法形成の只中にある。書記の方法と社会的背景という2つのレベルにおいて独特な条件を備えていることから、上述したような書き言葉研究にとって、貴重な事例となり得ると考える。本稿では、学校教科書と民間で発行されている雑誌の分析を通して、現代台湾語書き言葉が内包する多様性と、規範形成の動きを明らかにする。

## 第2節 先行研究

### 1. 概観

書かれた台湾語に関して最も研究の蓄積がなされているのは、文学の領域である。個別の作家、作品に関する研究の他に、台湾語文学全体ないしは台湾語文学史を俯瞰したものとして、林央敏(1996)、張春風・江永進・沈冬青(2001)、方耀乾(2012)、施俊州(2012)などが挙げられる。

一方、筆者の関心に近い言語学的な観点からの研究(を含むもの)には、鄭良偉(1989)、洪惟仁(1992)、臧汀生(1996)、張学謙(2003)などがあり、上述の文学研究も含めこれら台湾人研究者の著作は、それ自体が言語運動または論争の一角を成している場合も多い<sup>7</sup>。外国人研究者による台湾語書き言葉の研究は、管見の限りまだ多くないが、書かれた台湾語の通史とも言うべき Klöter(2005)や、インターネット上の文字使用を広東語と比較した吉川(2013)などが挙げられる。また(言語)社会学的研究として林初梅(2009)があり、これは台湾の「郷土教育」を対象としたものであるが、言語教育の視点から書き言葉の問題にも焦点を当てている。

以下では、本稿が対象とする2000年代以降の状況を詳細に扱ったものとして、Klöter(2005)と林初梅(2009)について詳しく取り上げる。

### 2. Klöter(2005)

Klöter(2005)は、16世紀から現代までの台湾語書き言葉の歴史を網羅した著作である。この中でクローターは、「ダイグラフィア(digraphia)」と「ダイオーソグラフィア(diorthographia)」という概念<sup>8</sup>が、現代台湾語にも適用可能かについて考察している(Klöter 2005, 38-39, 248-249頁)。クローターはこれらの概念が(a)同一の言語における2つの文字体系(又は正書法)の共存と、(b)一つの言語における文字体系(又は正書法)の交替の2種類に分類されるとした上で、台湾語の状況はこのどちらにも当てはまらないと述べ、その理由を以下のように説明している。

台湾語の複数の文字表記は、異なる書記環境や、文化的に規定された領域において共存してはいない。台湾語書き言葉の提唱者たちは寧ろ、多様な書記環境で機能的な制限なく認知されることを目指して競い合っている。[……]事例研究が示す通り、文字体系の交替が含意しているのは、ある確立された体系が別の体系に取って代わられるということである。しかしながら台湾語においては、多様な書記環境でしっかりと確立された文字表記というのは未だ曾て存在しない。

(Klöter 2005, 248-249頁、翻訳は筆者による、以下同じ)

過去にはローマ字はキリスト教に関係する領域、漢字はそれ以外の領域といった機能分担が見られたが、現在（2005年時点）ではそれぞれの提唱者や運動家が唯一の正書法を目指して競合しており、「ポリグラフィア (polygraphia)」及び「ポリオーソグラフィア (polyorthographia)」と呼び表すのがより適切であるというのが、クローターの主張である。

その上でクローターは、台湾語書き言葉の標準化が近い将来に起こるとは考え難いとも述べている。その理由としては、台湾語は公用語としての地位、及び教育を始めとする広範な使用領域が未だ確立されていないこと、また過去の抑圧的な政策への反省から、政府も強制力を伴う言語計画に消極的で、運動側もそれに対する拒否反応が強いことが挙げられている (Klötter 2005, 247-249 頁)。

### 3. 林初梅 (2009)

その競合の実態を詳細に分析したのが、林初梅 (2009) である。上述の通りこの著作自体は台湾の「郷土教育」に関する研究だが、その中の1章で台湾語の文字表記を巡る議論について考察しており、それを基にまとめたのが表1である。

表1 台湾語文字規範化論争の構図

1980年代：文字規範を巡る論争

文字規範	漢羅 (漢字+教会ローマ字)	全漢
主要人物	鄭良偉	洪惟仁



1990年代以降：争点は発音記号に移るが、根底には文字規範を巡る対立

発音記号	教会ローマ字	通用拼音	TLPA
主要団体	台湾羅馬字協會	全球台湾通用語言協會	台湾語文学会
文字規範	漢羅→全羅	漢羅→?	漢羅→全漢

(林初梅 2009, 225-250 頁を基に筆者が作成)

表2 教科書における文字・発音記号使用 (2003 学年度)

出版社名	教材名	発音記号の使用	文字表記の傾向
康軒文教事業	閩南語	TLPA、方音符号	漢字
金安 (真平)	台語読本	TLPA、方音符号	漢字
南一書局	閩南語	TLPA、方音符号	漢字
安可	台湾話読本 (TLPA版、教会ローマ字版、 通用拼音版の3種)	TLPA、方音符号、教会ローマ字、 通用拼音	漢字
育成	台湾閩南語	TLPA、方音符号	漢字
翰林	台語	TLPA、方音符号	漢字
	台語 (通用直接版)	通用拼音	漢羅文
仁林文化	福佬台語	通用拼音	漢羅文
台湾文芸	台語—台湾鶴佬話	独創の注音式	漢字
明台教育	福台語	通用拼音	漢羅文
開拓	國小台語	通用拼音	漢羅文

(林初梅 2009, 274 頁、レイアウトは筆者により改変)

議論の端緒となったのは、1980年代後半に母語復興運動の流れの中で起こった文字規範化を争点とする論争であった。漢字が不明確な語彙をどのように表記するかという点を巡り、漢羅派は教会ローマ字<sup>9</sup>で書くことを、全漢派は極力本字<sup>10</sup>を追究し漢字で書くことを主張した。その後1990年代になると、台湾語を含む「本土言語」が学校教育に導入された<sup>11</sup>ことをきっかけに、学習手段として発音記号の問題がクローズアップされるようになった。しかし林初梅によれば、そこには依然として文字規範を巡る対立が通底しており、将来の正書法として教会ローマ字派は全羅、TLPA<sup>12</sup>派は全漢をそれぞれ志向しつつ、現状としては通用拼音<sup>13</sup>派も含め、漢羅を容認・実践する構図であるという。実際にはここに挙げられた3つの主要なローマ字の他に、個人の提案になるものも含めると実に50種<sup>14</sup>に上るとも言われるローマ字表記が現れており、正に「発音記号の戦国時代」と言うべき状態であった(李勤岸2015、9頁)。

そうした議論百出の状態を反映して、本土言語教育、特に台湾語の教科書は、地方政府と民間出版社が主体となり、様々なバリエーションのものが数多く出版された。これらの教科書に対して事前検定は実施されず、教育部の委託を受けた国立編訳館が、実際に各学校で採用されたものを対象に事後評価を行うという形式が採られた。この背景には、「郷土言語の授業が実際にどのようなものになるか想定できなかったということだけではなく、発音システムと文字の規範化の未定に原因があると思われる」(林初梅2009、271頁)。林初梅は民間出版社の教科書における文字・発音表記を調査しており、その結果が表2である。

これらの内、育成のもの以外は全て事後評価の対象となっている。ここから分かる通り、発音記号/文字表記の組み合わせはTLPA・方音符号<sup>15</sup>/全漢と通用拼音/漢羅が主流となっており、教会ローマ字を採用しているものは少なく、また教会ローマ字を用いた漢羅や全羅による教科書は見られない。他方、教会ローマ字は「一般人向けの教材、文学作品や雑誌などの出版物は多く、台湾語運動を支える出版物のなかでは教会ローマ字が比較的優勢である」(林初梅2009、242頁)。

こうした中、教育部は2006年に「台湾閩南語羅馬字拼音方案」(以下「台羅拼音」と略称)を公告した。これは考案の立役者である李勤岸によれば、教会ローマ字とTLPAを折衷したローマ字表記であり、上述の「戦国時代」に終止符を打つために生み出されたものである(李勤岸2015、9-10頁)。また2007～2009年には計700語の「台湾閩南語推薦用字」(以下「推薦用字」と略称)が公告され<sup>16</sup>、2011年には約13,000語を収録した『台湾閩南語常用詞辞典』(以下『常用詞辞典』と略称)がインターネット上で公開されるなど<sup>17</sup>、漢字表記に関しても標準化の指針が示された。著作の上梓前に公告された台羅拼音について、林初梅は附記を設けた上で、「折衷型のものであるため、影響力を持ちえないと思われるが、その点の判断は今後委ねたい」(林初梅2009、290頁)と述べている。

### 第3節 用語の定義

次節以降で各書記媒体の具体的な調査・分析に入る前に、その際に用いるテキスト分類に関す

る用語について、ここで定義しておきたい。基本的にどの先行研究も、台湾語によるテキストをその使用する文字種から、全漢、漢羅、全羅の3種類に分類している。この分類自体は妥当なものと言えるが、異なる文字種の交ぜ書きにおいて（日本語の場合を考えても分かる通り）、一つの語をどちらの文字種で書くか、また文章全体に含まれるそれぞれの文字種の比率には、書き手や状況により差異が生じると考えられる。その点から見れば、全漢、漢羅、全羅の三者はある程度連続体を成している可能性があり、この三分法だけでは実際のテキスト内の微視的な状況を捉え切れない恐れがある。

よって本稿では、従来「漢羅」と呼ばれていたテキストを「限定漢羅」と「全面漢羅」の2つに分けて考えたい。まず「全漢」、「漢羅」、「全羅」のテキスト種別はそれぞれ以下のように定義される。

全漢：漢字のみによって構成されるテキスト

漢羅：漢字とローマ字によって構成されるテキスト

全羅：ローマ字のみによって構成されるテキスト

詳しくは後述するが、ここで対象とするのはテキスト本文であり、括弧内やルビでの使用は含まない。その上で、「限定漢羅」、「全面漢羅」を以下のように定義する。

限定漢羅：漢羅の内、ローマ字の使用が少数の語彙（擬態語や低頻度語など）に限られるもの

全面漢羅：漢羅の内、ローマ字が機能語を中心に多量かつ安定的に使用されるもの

両者の具体的な分類基準としては、構造助詞「[é (的)]<sup>18</sup>」の書かれ方に注目した。即ち、この語が「[的]」などの漢字で書かれている場合そのテキストは限定漢羅、「[é]」などのローマ字で書かれている場合には全面漢羅とし、両方がある場合は用例数の多い方を採った。この語を基準とする理由としては、代表的な機能語であり、台湾語テキストの中で最も使用頻度が高く、かつローマ字で書かれ易い語であることが挙げられる<sup>19</sup>。この基準で全面漢羅に分類されたテキストのローマ字比率が、限定漢羅に分類されたものより低いとは必ずしも言えないが、漢羅の中で大きな傾向を捉える意味では、一定の妥当性を備えているものとする。

#### 第4節 教科書における文字使用

まず始めに、台湾語の学校教科書における文字使用について見ていく。教科書という媒体を取り上げるのは、先行研究（林初梅 2009）で調査されているというだけでなく、公教育という使用領域の性格上、「規範意識」が最も強く表出すると予想されるからである。また、本土言語教育で台湾語を選択した児童・生徒全員が目にするのであれば、読み手が最も広範に亘る台湾語の書籍であると考えられることも、理由として挙げられる。

2018年時点で台湾語を含む本土言語は、義務教育課程において小学校6年間は必修で週1時限、中学校3年間は自由選択で学ばれており<sup>20</sup>、開始から15年以上を経た今も、教科書の審査制度は本質的には変わっていない。2008年に九年一貫課程の修正が行われた際にも、本土言語科目に正式な検定制度を採用することについては合意が得られていないと判断され、国家教育研究院(上述の国立編訳館の後身)が毎年民間出版社からの審査申請を受け付けるという形が採られることとなった。審査の方法はその他の教科書の検定と同様の形式で行われ、一定の品質を保証する制度とされているが、審査を申請するか否かは出版社の判断に委ねられており、未審査の教科書でも各学校が採用できる点は、その他の教科書と大きく異なる(蘇上恵 2011)。

2017年度の審査済み教科書6社・8種(国家教育研究院b)につき、それぞれの文字・発音表記を調査した結果をまとめたのが、表3である。

表3 教科書における文字・発音記号使用 (2017学年度)

出版社	教材名	巻数	発音記号	文字使用
安可	閩南語	1,2	台羅拼音/方音符号	全漢
真平	閩南語 (台羅版)	1-12	台羅拼音/方音符号	全漢
	閩南語 (通用版)	1-8	通用拼音/方音符号	全漢
侑巧	閩南語 (台羅版)	1-8	台羅拼音/方音符号	全漢
	閩南語 (通用版)	1,2	通用拼音/方音符号	全漢
翰林	閩南語 (台羅版)	1-12	台羅拼音/方音符号	全漢
大語	閩南語一福台語 (台通台羅整合版)	1-10	通用拼音/台羅拼音	限定漢羅
康軒	閩南語	1-12	台羅拼音/方音符号	全漢

(筆者作成)

文字使用については、本文が漢字のみで書かれる形式、即ち全漢が主流となっている。どの教科書も本文の各漢字の上下に2種類の発音記号を付しており、ほとんどが上側にローマ字、下側に方音符号を用いている。ローマ字は台羅拼音と通用拼音の2種類が見られるが、台羅拼音は全ての出版社が採用しており、また巻数の上でも1~12巻全てが審査を通過しているのは台羅拼音のもの(翰林と康軒)だけであることから<sup>21</sup>、台羅拼音の方が優勢であると言える。

14年前の状況(表2)と比較すると、発音記号についてはTLPA対通用拼音から台羅拼音対通用拼音へと、対立の構図が移行したとも言えるが、上述の通り台羅拼音が優勢となっている背景としては、台羅拼音が教育部の名の下で発表されたことで、TLPAの時代よりも公的な威信が強まっていることがあると考えられる<sup>22</sup>。文字使用も全漢が多いというだけでなく、漢字は全て上述の推薦用字及び『常用詞辞典』に準拠しており<sup>23</sup>、また教材名も統一が進むなど<sup>24</sup>、以前と比べ全体的に標準化が進んで来ていると言える。

そうした中、異彩を放っているのが大語出版である。6社中唯一ルビではなく本文にローマ字(通用拼音)が現れる限定漢羅<sup>25</sup>で書かれており、発音記号は漢字の上側に通用拼音、下側に台羅拼音と、二重にローマ字を付す独特の形式を採っている。また、教材名に「福台語」が入っている点にもこだわりが感じられる。編集には通用拼音設計の中心人物である余伯泉を始め、江永

進、許極燉などが関わっており、この教科書は通用拼音派の肝煎りで作られたものであることが窺える。しかし、拡大しつつある台羅拼音も無視できず苦肉の策として、他の教科書が方音符号を配している下側ルビを台羅拼音に充てたのではないだろうか。これにより、台羅拼音に慣れた教師でも教材を使用し易くなる一方で、特にローマ字に未習熟な段階で頼りにすることの多いであろう方音符号が無いために、児童の学習の便は犠牲になっているとも言える。

以上の状況を文字使用の傾向という観点からグラフ化したものが、図1(次節末)である。縦軸は教科書の種類数、横軸は漢字対ローマ字の比率を表し、全漢は100:0、全羅は0:100となる。漢羅については蔡秀俐(2009)の調査結果に基づき、便宜的に全面漢羅を80:20、限定漢羅を90:10の位置に設定した<sup>26</sup>。上述の通り、全羅や全面漢羅によるものは全く見られず、現在(2018年時点)の教科書は全体として漢字志向が極めて強いと言える。

## 第5節 雑誌における文字使用

次に、民間で発行されている台湾語雑誌の文字使用について検討する。ここで「台湾語雑誌」と定義するのは、内容の如何を問わず、文章の大半が台湾語によって書かれている雑誌である。前述のように林初梅(2009)は、教科書においては数が少ない教会ローマ字が、「台湾語運動を支える」一般向けの出版物においては逆に優勢であると述べており(林初梅2009、242頁)、雑誌からは教科書と異なる文字使用の傾向が観察できる可能性がある。一般向けの台湾語出版物には、詩集や小説など文学作品の単行本も数多く存在し、近年は学術書や論文にも、台湾語関連の分野を中心に台湾語で書かれたものが現れている。雑誌にはそれら様々なジャンルのテキストが一同に会して掲載されること、また定期的に発行されるので、最新の状況を調査したいという本稿の目的に適っていることから、私的な領域における出版媒体の代表として、ここでは雑誌に焦点を当てる。

表4は、1970年代以降に民間で発行された台湾語雑誌と、その文字使用の傾向をまとめたものである。教科書と違い、必ずしも紙面全体が統一された原則に則って書かれているとは限らないため、「文字使用」と「ローマ字」の欄は飽くまで主だったものを記載している<sup>27</sup>。

1970年代に米国で創刊された『台語通訊』を先駆けとして、台湾で正書法に関する議論が盛んになった1980年代後半から続々と創刊された雑誌の中では、教会ローマ字による漢羅が主流を占めつつ、様々な表記が実験・実践されていたことが分かる。

しかし台羅拼音が生まれた2006年以降、ローマ字に関しては台羅拼音を使用するものが増えつつあり、その他のローマ字表記は教会ローマ字を除いて姿を消している。文字規範の点では漢羅の他、全漢と全羅も引き続き見られるが、全漢・漢羅の文章はローマ字に台羅拼音を使用するものが多いのに対し、全羅文で用いられるのはほぼ教会ローマ字に限られている。このように教会ローマ字に関しては、台羅拼音への合流を拒む根強い使用者の存在と、文字規範としての全羅との結び付きの強さが見て取れる<sup>28</sup>。

2015年以降継続して刊行が確認されているのは、『海翁台語文学』、『台文戦線』、『台江台語文

表4 雑誌における文字使用の変遷

雑誌名	創刊年	停刊年	文字使用	ローマ字
台語通訊	1975	1976	漢羅	教会ローマ字
台湾語文月報	1977	?	漢羅	教会ローマ字
台語文摘	1989	1995	全漢	TLPA
Hong-Hiông	1989	1992	全羅	教会ローマ字
蕃薯詩刊	1991	1996	全漢/漢羅	?
台文通訊	1991	2012	漢羅	教会ローマ字
台語風	1992	1994	漢羅	教会ローマ字
台語學生	1992	1994	漢羅他	教会ローマ字
台湾郷土雜誌	1993	2003	全漢他	教会ローマ字他
台湾語文研究雜誌	1994	?	漢羅/全羅	普実台文
茄苳	1995	1999	漢羅/全漢→全漢	台音式他
掖種	1995	?	全漢	-
台湾百合論壇	1995	1996	漢羅他	教会ローマ字
5%台訳計画内部通訊	1995	1997	漢羅他	教会ローマ字
台江詩刊	1995	1998	全漢	-
台語人彩報	1996	?	漢羅	通用拼音?他
台語世界	1996	1998	漢羅	台音式
台文罔報	1996	2012	漢羅	教会ローマ字
菅芒花詩刊	1997	2008	漢羅→全漢/漢羅→全漢	教会ローマ字→TLPA→台羅拼音
島郷台語文学	1998	2004	漢羅 (/全漢)	台音式 (/TLPA)
台湾公論報(附属専刊)	1998	?	漢羅	教会ローマ字
時行台語文月刊	1998	?	漢羅	通用拼音?
蓮蕉花台文雜誌	1999	2005	漢羅	教会ローマ字
菅芒花台語文学	1999	2001	全漢	TLPA
TGB通訊	1999	2014	漢羅	教会ローマ字
Tâi-oân-jī	2000	?	全羅	教会ローマ字
台湾e文芸	2001	2001	漢羅/全漢	教会ローマ字/台音式/TLPA
海翁台語文学	2001		全漢/漢羅	教会ローマ字/TLPA→台羅拼音
Tâi-oân Lô-má-jī Hiap-hoē Thong-sin	2002	?	全羅/漢羅	教会ローマ字
台湾囡仔報	2002	2003	?	?
波根	2002	2004	漢羅	教会ローマ字
台文戦線	2005		全漢/漢羅	台音式他→台羅拼音
台湾母語教師協會会訊	2005	2007	漢羅	?
海翁台語文教学季刊	2008	2011	漢羅(/全漢)	台羅拼音
首都詩報	2009	2012	漢羅	台羅拼音
台語研究	2010		漢羅/全羅	教会ローマ字/台羅拼音
台語教育報	2011	?	?	?
台文通訊BONG報	2012		漢羅 (/全羅)	台羅拼音 (/教会ローマ字)
台江台語文学	2012		漢羅/全漢	台羅拼音
台文筆会年刊	2013		全羅/漢羅	教会ローマ字
台湾文芸	2013		漢羅	教会ローマ字

(楊允言・張學謙・呂美親編 2008、520-523 頁を基に、施俊州編 2015 も参考とし、筆者による調査の結果を加えて作成)



学』、『台語研究』、『台文通訊 BONG 報』、『台文筆会年刊』、『台湾文芸』の7誌であり<sup>29</sup>、この内『台文筆会年刊』と『台湾文芸』以外は広く一般に投稿を募っている。投稿規定で文字・表記に関して何も制限を設けていないのは、『台文戦線』のみである。『海翁台語文学』と『台江台語文学』は全漢、漢羅、全羅については何も指定がないが、ローマ字は台羅拼音を用い、漢字は推薦用字ないし『常用詞辞典』に基づくよう定めている。『台語研究』は漢羅と全羅のみ(全漢は不可)、ローマ字は台羅拼音と教会ローマ字のみを受け付けるとある<sup>30</sup>。

文字規範が最も徹底しているのは、『台文通訊 BONG 報』と『台湾文芸』である。『台文通訊 BONG 報』は、投稿された文章を全て「文字編集」した上で掲載しており、台羅拼音と推薦用字の使用だけでなく、どの語にローマ字を用いるかを定めた独自の用字表に基づいて、単語レベルの文字選択までが統一された全面漢羅文が実践されている<sup>31</sup>。これは、前身の一つ『台文罔報』を編集していた陳明仁(2018年時点では『台文通訊 BONG 報』の「社長」)の方針<sup>32</sup>と、もう一つのルーツ『台語通訊』の産みの親である鄭良偉の漢羅の主張<sup>33</sup>を受け継いだものであろう。『台湾文芸』は投稿公募の形式は採っておらず、文章はほぼ全て教会ローマ字による全面漢羅で、「編集政策」の欄には「ローマ字3、4割の「漢羅合用文」を推し進める」とある<sup>34</sup>。また『台文筆会年刊』も、台湾語ペンクラブ(台文筆会)の機関紙として会員の文章のみ掲載しているようであり、規定はないものの、文章はほぼ全て教会ローマ字による全羅または全面漢羅である。陳明仁は『台湾文芸』の総編集、並びに台湾語ペンクラブの理事長でもあり、これら3誌の文字使用には、彼の台湾語書き言葉に対する考え方が強く影響していると考えられる。

表5 各雑誌の文字使用別テキスト数

雑誌名	巻数	全羅	全面漢羅	限定漢羅	全漢	合計
海翁台語文学	187期(2017年7月)	0	3	12	19	34
	183期(2017年3月)	0	2	12	23	37
台文戦線	48号(2017年10月)	2	10	16	23	51
	47号(2017年7月)	2	11	10	27	50
台江台語文学	24期(2017年11月)	0	11	22	8	41
	23期(2017年8月)	0	12	4	3	19
台語研究	9巻1期(2017年3月)	1	4	0	0	5
	8巻2期(2016年9月)	1	3	0	0	4
台文通訊BONG報	280期(2017年7月)	1	30	0	0	31
	279期(2017年6月)	1	21	0	0	22
台湾文芸	第3年第2号(2015年10月)	1	17	0	0	18
	第3年第1号(2015年4月)	1	15	0	0	16
台文筆会年刊	No.3(2016年6月)	7	29	1	0	37
	No.4(2017年6月)	5	25	0	1	31
合計		22	193	77	104	396

(筆者作成)

表5は上記7誌に掲載されたテキストにつき、その数と文字使用を調査した結果である。2015

～2017年の間に発刊されたものをそれぞれ2巻ずつ抽出し、テキストの本文を対象にローマ字使用の有無、「(的)」の文字遣い(3節参照)によって分類した<sup>35</sup>。こうして見ると、雑誌毎に文字使用の偏りが存在することが分かる。『海翁台語文学』と『台文戦線』は全漢が約半数を占めるのに対して、『台語研究』、『台文通迅 BONG 報』、『台湾文芸』には、上述の通りそもそも投稿規定や編集政策で排除されているので、当然全漢は存在しない。またこの3誌には限定漢羅も全く見られないことから、少なくともこれらの雑誌が想定している「漢羅」とは、本稿で謂う所の全面漢羅のことであると言える。

そして6誌の合計から、雑誌全体における文字使用の傾向を教科書と合わせて図1にグラフ化した。漢羅全体で全テキストの68パーセントを占め、確かに「台湾語の文章創作の最も普遍的な方式」(蕭阿勤 2012, 261-262 頁)と言っても良さそうだが、上述のように典型的な「漢羅」と捉えられている全面漢羅と全漢の中間的形態として、限定漢羅を分離して見ることにより、実態はより多様であることが分かる。

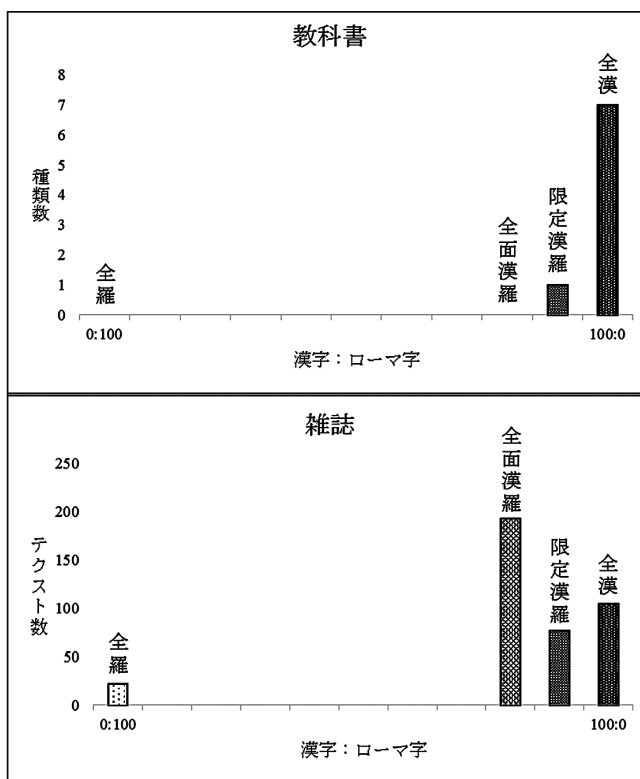


図1 教科書と雑誌における漢字／ローマ字比率と種類数分布  
(筆者作成)

## 第6節 考察と今後の課題

ここまで教科書と雑誌における台湾語の文字使用について見てきた。ここではそれらを総合的に見てどのように記述できるか、またそこからどのような事が言えるのかについて考察してみたい。

まず先行研究が指摘した正書法を巡る論争・競合の内、「戦国時代」とまで言われたローマ字表記法の勢力図について、その変遷を図示したのが図2である。林初梅(2009)と本稿の調査で明らかになった通り、台羅拼音が登場するまで、学校教科書は TLPA と通用拼音、一般向け雑誌は教会ローマ字を中心として様々な表記法が競合する状態であったが、台羅拼音は公告から10余年を経て、教科書と雑誌双方で主流となるに至っている。

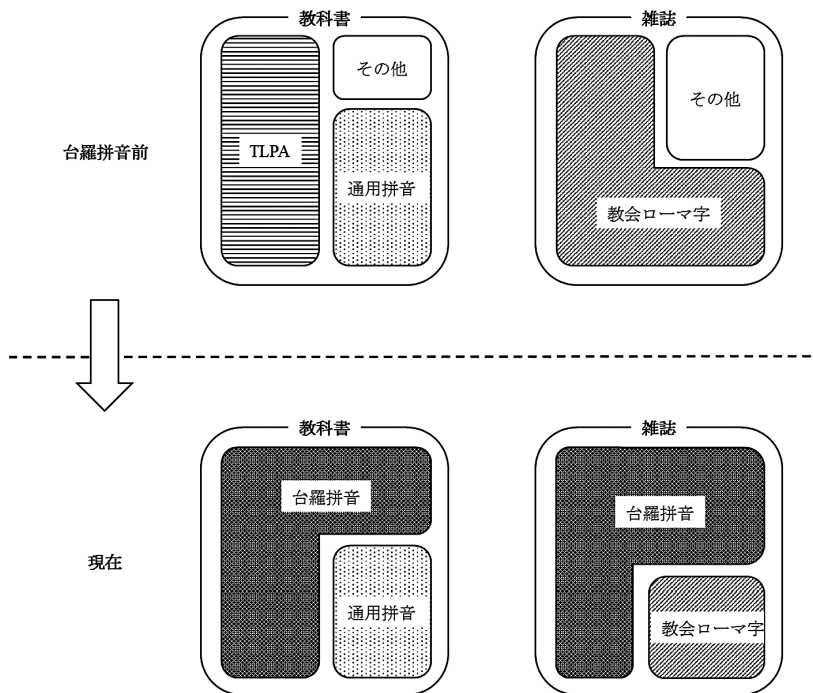


図2 ローマ字表記法の勢力図  
(筆者作成)

教育部の国語推行(普及推進)委員会において台羅拼音策定の中心となった李勤岸は、その経緯について、当初通用拼音、教会ローマ字、TLPA三者を糾合することを目指したが、通用拼音派が拒絶したため、TLPAの推進者洪惟仁と協同し、最終的に教会ローマ字とTLPAの二者を統合する形となったと述べている(李勤岸2015、10頁)。教科書に通用拼音が残っているのは、その結果であろう。また、言語運動の方面では教会ローマ字も根強く使われ続けており、こちらの

支持者は文字使用について全羅を志向する人々が中心になっている。しかしいずれにせよ台羅拼音の登場により、台湾語は初めて学校教育と言語運動の両方の場で幅広く使用される共通のローマ字表記法を得たと言って良い。また漢字についても、教科書、雑誌ともに推薦用字の使用が主流になりつつあることが明らかになった。

このように台羅拼音と推薦用字という、言わば教育部の「規範セット」が普及しつつあるということは、ローマ字と漢字それぞれの文字体系内における多様性は縮小し、規範形成が進んでいるということであり、クローターの謂う所の「ポリオーソグラフィア」(2節2.参照)は解消に向かっていると言えるのではないだろうか。台羅拼音と教会ローマ字の差異が実際には僅かなものである<sup>36</sup>ことを考慮に入れると、その傾向は益々強く見える。クローターは、政府が強制力の伴う言語計画に消極的であることを、台湾語書き言葉が標準化されない理由として挙げていたが(2節2.参照)、教科書の審査制度とその結果(4節参照)からも分かる通り、2000年代に出された教育部の規範にも、何ら実効的な強制力は伴っていない。にも関わらず普及・浸透が進んでいることは、言語政策研究の観点からも注目すべき事象であろう。

それに対して、全漢、漢羅、全羅という文字種の選択のレベルでは多様性が大きく、これはクローターの言う「ポリグラフィア」、或いはダイグラフィア(2節2.参照)といったレベルの問題である。本稿では、従来「漢羅」という言葉が主に指していた全面漢羅と全漢の中間形態として、限定漢羅という概念を導入し、全漢と漢羅がある程度連続体(グラデーション)を成していることを指摘した。2種類の文字が厳密な法則なく混在するという点では、同じく漢字と表音文字の混合体系である日本語や韓国語とも共通していると言えるが、台湾語は今回明らかになったように、書記媒体によって教科書は全漢、雑誌は漢羅が多いという顕著な傾向が見られるのが特徴である。

本稿では、台湾語書き言葉における文字使用の最新状況を明らかにしてきたが、この10年間の最も大きな変化は、一言で言えば規範形成の進展であった。但し、それは主に漢字とローマ字という個々の文字体系内部において起こっており、文字種の選択の様相は依然多様である。この規範形成と多様性という一見相反する現象の背後には、漢字と表音文字の共存という書記体系自体の特徴による構造的な要因と、書き手と読み手の文字や言葉に対する意識(=言語イデオロギ)という、行為主体側の要因の両方が働いていると考えられ、書記言語の形成においてこの両者が作用するメカニズムを解明することが、今後の課題である。

---

(註)

- 1 シナ・チベット語族シナ語派(漢語)の閩南語(閩南方言)に属し、主に台湾で使用されている。話者人口は、2010年の国勢調査に拠ると約1,750万人(行政院主計總處2012:26)。福建省南部で話される閩南語とは、互いに意思疎通は可能であるが、主に発音や語彙の面で違いがある。他に「(台湾)閩南語」や「福佬(ホーロー)語」など様々に呼称されるが、本稿では「台湾語」で統一する。
- 2 例えば河野(1994)やクルマス(2014)が依って立つ「文字論」がそれに当たる。但し、言語学の一領域として「文字論」という枠組みを立てることの妥当性については懐疑的な見方も存在し(例えば矢田2012:4-5)、「文字学」や「表記論」との関係を含め、この種の研究の学問的位置付けについては、議論の余地がある。

- 3 昨今の文字・表記研究の論考では、漢字は「表語文字」と呼ぶ方が適切であるとされているが(河野 1994 : 11、クルマス 2014:67)、筆者の研究においては、漢字が必ずしも特定の語と結び付いているとは言えない(例えば一つの字にいくつもの読みがあったり、同じ文字列が中国語でも台湾語でも読まれ得るといったような)事例も多いことから、「表意文字」の語を用いることとしたい。
- 4 本稿においては、台湾で一般に「国語」や「華語」と呼称される、北京方言を基礎とした標準中国語を指すこととする。
- 5 Ferguson (1959) が提唱し、Fishman (1968) が発展させた概念。フィッシュマンによると、典型的には「親密さ、親族関係や友人関係といった閉じたネットワーク、家庭、日常の仕事、民族性・自発性・仲間関係に基づく「低次の文化」に関連付けられる「低位言語(変種)」と、「特別な地位、個人間の距離や力関係の強調、格式や儀式、高次の文化(宗教、正式な学問、政府やイデオロギー)」に関連付けられる「高位言語(変種)」の並存と定義される(Fishman 1968 : 35-36)。
- 6 台湾における台湾語の話者数は、絶対的にも相対的にも「少数」とは言い難いが、本稿では木村の定義に倣い、「他のより強力な言語によってその使用が相対的に制限された状態にある言語」(木村 2005 : 3)を広義の「少数言語」と捉えることとする。
- 7 例えば、鄭良偉と洪惟仁は後述する文字規範化論争の主要人物であり(表 1 参照)、鄭良偉(1989)と洪惟仁(1992)にはそれぞれ論争の中心となった論考も収められている。
- 8 どちらも Zima (1974) が初めに提唱した概念。ダイグラフィアは通常「同一言語に 2 つまたはそれ以上の異なる書記体系が使用されること」(DeFrancis 1984 : 59)と定義され、セルボ・クロアチア語(キリル文字とラテン文字)や、ヒンドスタニー語(デーバナーガリー文字とアラビア文字)などが典型的な例として挙げられるが、その捉え方には時代や研究者によって揺れが見られる。ダイグラフィア概念の変遷については、Grivelet (2001) を参照。ダイグラフィアが基本的には異なる文字体系の使用を指すのに対して、ダイオソグラフィアは同一の文字で 2 つ以上の正書法(例えば日本語の仮名における旧仮名遣いと現代仮名遣い)が存在することを指すが、管見の限りダイオソグラフィアについて具体例を挙げて考察した研究は見られない。
- 9 19 世紀にキリスト教宣教師によって創られた表記法で、台湾語のローマ字表記法の中では最も古い歴史を有する。「白話字」とも呼ばれ、発音記号ではなく文字として使用する場合特にこちらの呼称が用いられる傾向があるが(林初梅 2009 : 228-229)、本稿では「教会ローマ字」で統一する。
- 10 後からの当て字ではなく、その語の古漢語における語源に対応する(とされる)漢字。
- 11 1994 年に「郷土教学活動」の一環として始まり、2001 年から実施された「九年一貫課程」において、小学校では必修科目、中学校では選択科目とされた。「本土言語」とは、中華民国による接收以前から台湾で話されていた台湾語・客家語・原住民諸語を指し、これらの中から何れか 1 つを選んで履修する。なお、2018 年から始まった「十二年国民基本教育」においては、近年のベトナムやインドネシアなど主に東南アジアからの移民「新住民」の言語も追加されて、「本土語文/新住民語文」と呼称され、「国語文」、「英語文」、「第二外国語文」と共に「語文」領域を構成する科目として、定義し直されている(國家教育研究院 a)。
- 12 正式名称は「台湾語言音標方案(Taiwan Language Phonetic Alphabet)」。パソコン入力上の不便さなど、教会ローマ字の持つ問題点を解消するため、1992 年に台湾語文学会が発表した。
- 13 中国語、台湾語、客家語、英語など諸言語間の通用性を重視して、中央研究院の余伯泉が中心となって設計し、1998 年に発表したローマ字表記法。
- 14 1850 年の教会ローマ字創成以降に出現したローマ字表記の数。詳細は李勤岸(2015) 13 ~ 14 頁を参照。
- 15 台湾で中国語の発音表記に用いられている注音符號(字母)を改良したもので、1946 年に朱兆祥により考案された。
- 16 2007 年に第 1 弾 300 語、2008 年に第 2 弾 100 語、2009 年に第 3 弾 300 語を公告、また 2014 年には修正版を発表した。
- 17 試用版は 2008 年から公開。また収録項目数は、読み方だけで語積がない単字や中国語と共通の語なども含めると、約 24,000 項目に上る。
- 18 連体修飾を表し、中国語の「的」とほぼ同じ、日本語の「の」に近い働きをする助詞。なお、本稿において台湾語を表記する場合、特に断らない限り台羅拼音及び推薦用字を用いる。
- 19 台湾語文コーパスに拠れば、漢羅文中の使用率は「è」が 5.3715 パーセント、「的」が 0.2764 パーセント(楊允言・張學謙)。但しローマ字の方は類別詞(量詞)の「è(个)」も含んでいる可能性がある。
- 20 郷土言語教育の実態を調査した松尾によれば、中学校で実際に開講されている例はほとんど存在しないといいい、高校受験に向けた競争激化が背景にあると分析されている(松尾 2010 : 90)。
- 21 これらの教科書は全て小学生を対象にしており、1 学期に 1 巻が配され、6 年間で 12 巻を終える構成となっ

- ている。
- 22 TLPA の場合も、台湾語文学会から発表された後に教育部が推薦の通達を出しており、一定の後押しを得ていた (林初梅 2009 : 238)。
  - 23 真平と康軒は序文でその旨言明しており、それ以外の教科書も明記はされていないものの、筆者が調べた限り推薦用字や『常用詞辞典』と異なる漢字は見られない。
  - 24 課程綱要 (学習指導要領) 上の正式な科目名は「閩南語」である。
  - 25 第 1 巻の本文において実際にローマ字で書かれている語には、「bih (覷) (隠れる) や「hàinn (幌) (揺らす) など、推薦用字が中国語で使われることの少ない、或いは中国語の意味とは異なる字である動詞や、「kók (略) (鶏の鳴き声) といった擬音語が見られた (ここでは台羅拼音を用いているが、実際には通用拼音で書かれている)。
  - 26 蔡秀俐 (2009) は台湾語文コーパス (楊允言が中心となり収集・作成した書き言葉コーパス「台語文語料庫」) を用いて、漢羅文に含まれる延べ音節数比率は漢字が 78.84 パーセント、ローマ字が 21.16 パーセントと報告している。但し当該コーパスは、対象となっているテキストの細目が不明確である点に問題がある。ここでは、本稿で謂う所の全面漢羅によるテキストが多いものと推測し、上記のような比率を設定した。
  - 27 「?」は未確認、「-」はローマ字が使われていないことを示す。
  - 28 この事は、教会ローマ字推進の中心的な団体である台湾羅馬字協会が、教会ローマ字と全羅を宗旨として堅持していることから裏付けられる。協会規約は、台羅拼音が公告された 2006 年以降 3 度 (2007、2015、2016 年) 改定されているが、第 1 条 1 項の「本会の謂う所のローマ字とは、伝統的に長老教会の白話字聖書が使用してきたローマ字表記法のことである」という条文に変更はなく、教会ローマ字以外のローマ字に関する記載も追加されていない (台湾羅馬字協会)。また、筆者が 2016 年 2 月 14 日に協会の事務所前で行ったインタビューにおいて、蔣為文理事長は「漢羅は全羅への過渡期として捉えている」と発言している。
  - 29 表 4 中停刊年が空欄になっているもの。なお「?」になっているのは、近年刊行が確認できないが、停刊年がはっきりしないものである。
  - 30 漢字については「本誌と台語信望愛の推薦用字」を推奨するとある。「台語信望愛」はキリスト教系の台湾語情報サイトであり、「信望愛台語客語輸入法」というコンピューター用の台湾語入力ソフトを公開しているので、そこで変換される漢字のことを指していると思われる。なお教育部は、台羅拼音と推薦用字及び『常用詞辞典』に準拠した別の台湾語入力ソフト「台湾閩南語漢字輸入法」をインターネット上で公開している。
  - 31 但し、教会ローマ字とそれによる全羅文での掲載を希望する場合は、例外的に認められている。同誌の文字編集を担当する劉承賢氏に提供頂いた用字表は Excel ファイルの形式で、教育部の推薦用字表にある 700 語につき、漢字で書くかローマ字で書くかが示されている。
  - 32 陳明仁は脚本、詩、小説など多くの台湾語による作品を創作しており、代表的な作品集に『拋荒的故事』(前衛出版) がある。クローターによれば、陳明仁は使用する漢字を 2,500 余字の常用字に限定する独自のルールで『台文罔報』の文章を編集しており、漢羅を全羅に至る過渡期の方策と考えていた (Klöter 2005 : 228-230)。
  - 33 『台文通訊 BONG 報』は、『台文通訊』と『台文罔報』が 2012 年に合併して出来た雑誌であるが、『台文通訊』の系譜は、『台湾語文月報』とその前身『台語通訊』に遡る (陳豐惠 2011 : 18-21)。鄭良偉は前述の文字規範化論争において漢羅を提唱した、在米の言語学者。
  - 34 但しそれは「本誌編集の文字遣いの実務 (集団のレベル) に限られ、作者の書記の自由 (個人のレベル) を縛ろうとするものではない」とも述べられている。
  - 35 ここでのテキスト本文とは、題名、署名、要旨、註を除いた部分を指し、括弧内やルビ、引用文内での使用は含まない。またローマ字で書かれていても、原語の綴りそのままの外国語・外来語は除外した。テキストの区切りは原則目次に従う (詩で同一作者の作品が連続している場合は 1 つと数える) が、途中で文字使用が変化する場合は別個に数えた。台湾語以外の言語 (中国語や英語など) のテキストは除外し、また序言や巻頭辞は含めたが、お知らせや広告、名簿などは除いた。なお主に詩において、テキストが短いと「é (的)」が一度も表れないことがあり、基本的には他にローマ字が含まれれば限定漢羅、含まなければ全漢に分類したが、『台文通訊 BONG 報』のものについては、上述の編集方針からそれも全面漢羅と判断した。『台文筆會年刊』に限定漢羅と全漢が 1 つずつあるのはこれに当たり、他のテキストの傾向から見れば、これらも或いは全面漢羅に分類するのが妥当かもしれない。
  - 36 紙幅の都合上ここでは詳述しないが、台羅拼音 (台羅) と教会ローマ字 (教羅) の間で完全に異なるのは、2、3 の子音や母音のみである。一方通用拼音は、声調表示の原則が異なる (通用拼音は本調ではなく変調後の声調を表示) など、隔たりが大きい。

## (参考文献)

## 英語 (アルファベット順)

- DeFrancis, John (1984), "Digraphia," *Word*, vol.35, no.1, pp.59-66.
- Ferguson, Charles (1959), "Diglossia," *Word*, vol.15, no.3, pp.25-40.
- Fishman, Joshua A. (1968), "Sociolinguistic perspective on the study of bilingualism," *Linguistics*, vol.36, pp.21-49.
- Grivelet, Stéphane (2001) "Introduction," *International Journal of the Sociology of Language*, vol.150, pp.1-10.
- Klötter, Henning (2005), *Written Taiwanese*, Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.
- Woolard, Kathryn A. (1998), "Introduction—Language Ideology as a Field of Inquiry, in Bambi B. Schieffelin / Kathryn A. Woolard / Paul V. Kroskrity eds., *Language Ideologies—Practice and Theory*, New York: Oxford University Press, pp.3-47.
- Zima, Peter (1974), "Digraphia: The case of Hausa," *Linguistics: an international review*, vol.124, pp.57-69.

## 台灣語 (筆画順)

- 台灣羅馬字協會 [SIA-THOÂN HOAT-JÎN TÂI-OÂN LÔ-MÁ-JÌ HIÁP-HOÊ CHIONG-THÈNG 社團法人台灣羅馬字協會章程] ([http://www.tlh.org.tw/Chiongtheng/chiongtheng\\_2016.pdf](http://www.tlh.org.tw/Chiongtheng/chiongtheng_2016.pdf) 2018/4/3 閱覽)
- 李勤岸 (2015) 「「優勢符號」 kap 「合理符號」 ê 互動—論台語羅馬字拼音符號 ê 競爭 kap 整合」 李勤岸『台灣話 ê 文字化 kap 文學化』開朗雜誌, 8-38 頁
- 施俊州 (2012) 『臺語文學導論』台南、台灣文學館
- 施俊州編 (2015) 『台語文學發展年表 Tâi-gí Bûn-hák Hoat-tián Nî-pió』台南、台灣文學館
- 張春風・江永進・沈冬青 (2001) 『台語文學概論』台北、前衛出版
- 張學謙 (2003) 『行向多文字 ê 台語文—文字態度 kap 政策論文集』屏東、睿煜出版
- 陳豐惠 (2011) 「李江却台語文教基金會 kap 台灣母語復振運動」台灣師範大學碩士論文
- 楊允言・張學謙「台語文語料庫蒐集及語料庫為本台語書面語音節詞類統計」(<http://ip194097.ntcu.edu.tw/giankiu/keoe/KKH/guliau-supin/guliau-supin.asp> 2017/12/15 閱覽)
- 蔡秀俐 (2009) 「羅馬字 ti 台語文漢羅文本中 ê 使用分析—以台語文語料庫為基礎」台東大學碩士論文

## 中國語 (筆画順)

- 方耀乾 (2012) 『台語文學史暨書目彙編』高雄、台灣文著
- 行政院主計總處 (2012) 「99 年人口及住宅普查 總報告統計結果提要分析」(<https://www.stat.gov.tw/public/Attachment/21081884771.pdf#search=%E5%B9%B4%E4%BA%BA%E5%8F%A3%E5%8F%8A%E4%BD%8F%E5%AE%85%E6%99%AE%E6%9F%A5+%E7%B8%BD%E5%A0%B1%E5%91%8A%E7%B5%B1%E8%A8%88%E7%B5%90%E6%9E%9C%E6%8F%90%E8%A6%81%E5%88%86%E6%9E%90%27> 2018/3/28 閱覽)
- 林央敏 (1996) 『台語文學運動史論』台北、前衛出版
- 洪惟仁 (1992) 『台語文學與台語文字』台北、前衛出版
- 國家教育研究院 (a) 「十二年國民基本教育課程綱要」([http://www.naer.edu.tw/ezfiles/0/1000/attach/87/pta\\_5320\\_2729842\\_56626.pdf](http://www.naer.edu.tw/ezfiles/0/1000/attach/87/pta_5320_2729842_56626.pdf) 2016/11/24 閱覽)
- \_\_\_\_\_ (b) 「106 學年度國民小學本土語言教科圖書一覽表 (依 97 課程綱要編輯審查)」(<http://www.naer.edu.tw/files/15-1000-10941.c254-1.php?Lang=zh-tw> 2017/9/10 閱覽)
- 楊允言・張學謙・呂美親編 (2008) 『台語文運動 訪談暨史料彙編』台北、國史館
- 鄭良偉 (1989) 『走向標準化的台灣話文』台北、自立晚報文化出版部
- 臧汀生 (1996) 『台語書面化研究』台北、前衛出版
- 蕭阿勳 (2012) 『重構台灣：當代民族主義的文化政治』台北、聯經出版
- 蘇上惠 (2011) 「本土語言教科圖書審查制度簡介與反思」『國家教育研究院電子報』16 ([http://epaper.naer.edu.tw/index.php?edm\\_no=16&content\\_no=341](http://epaper.naer.edu.tw/index.php?edm_no=16&content_no=341) 2017/9/10 閱覽)

## 日本語 (五十音順)

- 王育德 (1985) 「「福佬」「河洛」語源論争の果ては一漢字のアリ地獄(上)」『台湾青年』295, 16-23 頁
- 木村護郎クリストフ (2005) 『言語にとって「人為性」とはなにか—言語構築と言語イデオロギー：ケルノウ語・ソルブ語を事例として』東京、三才社
- クルマス, フロリアン (2014) 齋藤伸治訳『文字の言語学—現代文字論入門』東京、大修館書店
- 河野六郎 (1994) 『文字論』東京、三省堂

- 
- 松尾慎 (2010) 「台湾における『郷土言語教育』の実態—台中市と新竹縣の公立小学校における調査より」パトリック・クハインリッヒ・松尾慎編『東アジアにおける言語復興』三元社、85-110 頁
- 矢田勉 (2012) 『国語文字・表記史の研究』東京、汲古書院
- 吉川雅之 (2013) 「ウェブサイトにおける音声言語の書記—香港粵語と台湾閩南語の比較」『ことばと社会』第 15 号、12-40 頁
- 林初梅 (2009) 『「郷土」としての台湾—郷土教育の展開にみるアイデンティティの変容』東京、東信堂

(2018 年 9 月 20 日投稿受理、2019 年 2 月 20 日採用決定)